

履修モデル作成者：板橋 美也

**テーマ**：比較文化の視点を身につける

**関連の深いコース**：人間文化コース

### 1. このテーマを学ぶために

昨今世界の諸地域の人々と連携してさまざまなグローバルな課題に取り組むことが求められる中、皆さんも将来、多様な考え方や文化の人々と協調性を保ったり、交渉したりする必要性が生じるでしょう。その際、大学で、物の見方はひとつとは限らずさまざまな見方ができることに気づき、多様な考え方を理解する姿勢を身につけることができれば、それが大きな力になると考えます。こうした力を身につける一つの方法として、比較文化の視点を身につけることを提案します。

人は、他文化に触れることで、自文化の中で自明だと思っていたことが実はそうではないことに気づき、自文化をより深く知ることになります。そうして自分が他文化を見る際に依拠している文化を自覚することによって、他文化をよりよく知るようになる、というように、異文化理解の作業には、文化比較の往復運動がくり返されています。人は各自、何らかの文化の中で個を育み存在する以上、ある文化を、どんな特定の文化にも依拠しないニュートラルな視点から分析することはできませんが、上記のような文化比較の作業をくり返すことで、徐々にその文化への理解を深めていくことはできるでしょう。しかし、異文化理解の歴史を見ると、文化比較の作業にはその時々の世界の諸地域の支配・被支配の関係が分かれ難く結びつき、そうした関係を強化するために文化比較の作業が利用されてきた事例は、枚挙にいとまがないことがわかります。それは、表向きは植民地支配がほとんど無くなった今日の世界でも、実はさまざまな形をとつて続いているのです。比較文化研究は、そのような文化比較の落とし穴を明るみに出すことで、文化比較の仕方そのものを自己批判的にとらえ続けることも行います。

たとえば、私が担当する「西洋美術史論」では、19世紀半ば以降「西洋」の人々（この場合特に「イギリス」）が「日本」の文化をどのように見てきたのかを追っていくことで、（皆さんの中多くにとっては）自文化である「日本」の文化を新たな視点から捉え直すと同時に、当時「日本」の文化を評していた人々が依拠していたところの文化である「イギリス」の文化について学ぶという文化比較の往復運動を実践します。また、実は当時、「イギリス」も「日本」も先に述べたような文化比較の落とし穴におちいっていたことを見ていくことで、文化比較の仕方そのものを批判的にとらえる姿勢も身につけることをめざします。

この授業はほんの一例で、本学部には「日本」の中の様々な文化やその他世界の多様な文化について学べる授業が用意されていますので、それらの授業を通して、自文化と他文化について、さまざまな角度から理解する姿勢を身につけていくことができます。また、英語やその他外国語能力を身につけることは、皆さんが今後活躍する世界を広げてくれるだけでなく、自文化や他文化への理解も深める一助となるので、ぜひ頑張ってもらえればと思います。

### 2. テーマに関連した推奨科目

西洋美術史論、研究会 A「美術・デザインと持続可能な社会」、グローカル・コミュニケーション、比較演劇論 I・II、日本詩歌の伝統、日本美術史論、現代思想と人間 I・II、仏教思想、西欧近代批判の思想、英語、その他外国語